

広汎性発達障害傾向を持つ子どもの 小学校移行期における学校・生活状況と支援ニーズ —「第4回愛知の子ども縦断調査」より—

小淵 隆司¹ 山本 理絵 神田 直子

I. 問題と目的

これまで、障害児の教育は、特別支援学校、ならびに特別支援学級で行われてきた。しかし、今後の特別支援教育はそれらに加え、通常の学級でも特別支援教育を行うこととなった。その対象がいわゆる「発達障害」児である。対象と場の拡大が今後の特別支援教育の特徴である。しかし、現在のところ、これらの教育を拡充していくための十分な教育条件整備が行われていない中で、実際にいる「発達障害」児の特別支援教育をすすめているのが実際である。

一方、「発達障害」は、知的な遅れとは異なる「軽度」の発達の問題であるがゆえに、親や周囲の認識が難しい。さらに、現行の乳幼児健診や就学時健診では、知的発達の障害や明確な障害の発見・把握に焦点が当てられているため、これらの「発達障害」は発見・把握されないまま小学校へ入学することも稀なことではない。そして、障害や発達の問題が周囲に「見えにくいことや気づかれにくい」こともあって、様々な二次的な問題を併存することも少なくない。さらにこれらの「発達障害」児の育児においては、通常の関わりや対応ではうまくいかないことがしばしば見受けられる。そして、この「通常の関わり」ではうまくいかない、そのことにとっても苦勞をしている、と理解することが「発達障害」児の理解の問題においては、重要なことだと思われる。

このような状況の中で、「発達障害」(疑いを含む)の子どもやその養育者には、子どもが学校へ入学した後にどのような困難や支援ニーズがあるのだろうか。宋・伊藤らは、「発達障害」を持つ子どもの親の支援ニーズを明らかにするために、小学校1年から中学校3年までの高機能広汎性発達障害の子どもの親へ、ニーズ調査を行った^{2,3}。それによると、子どもは「友達、先生との関係、

1 愛知県立大学非常勤講師

学習面、行動面」について、親は「先生との関係、他の親との関係」で多くの問題を抱えていることが明らかとなった。そして、学校における子どもへの支援として、子どものニーズに応じた支援、通常学級を含めた全教職員の障害の理解と学校内の連携、他の専門機関との連携、他児と他児の保護者の理解の推進、などがあげられている。さらに、療育・専門機関に対して「学校への助言・指導」を求める要望も多かったことを報告している。

筆者らが行ってきた「愛知の子ども縦断調査」の子どもたちも学童期に達した。その中には上記のような障害に関連する傾向のある子どもも含まれる。これらの子どもたちやその親は、幼児期から学童期への移行時にどのような困難や不安、支援ニーズを持っているのだろうか。幼児期とは教育内容・教育制度・人的環境が異なる小学校への入学にあたって、想像以上に様々な困難を抱えている可能性が推測される。宋らによる調査は、全国の療育・相談機関や親の会に所属している中学生までを対象としたものであり、われわれの、乳幼児健康診査受診者を対象に始めた縦断調査では、小学校低学年で「発達障害」を認識していないケースも多く含まれている。第4回「愛知の子ども縦断調査」の結果を分析し、このような問いに答えることは、特に移行期に困難をかかえるこれらの障害を持つ子どもへの、援助のあり方をさぐる一助になるものと考えられる。

本論文では、とくに広汎性発達障害（PDD）の傾向がある子どもに注目し、その親は、子どもが小学校に入学して、その成長をどのように感じ、どのようなことに戸惑いや不安をもっているのか、また、学校や地域に対してどのような要望があるのかを一般群と比較しながら分析し、小学校移行期にどのような支援が必要とされているのか明らかにしたい。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

本研究の分析対象となったのは、2007年に実施された第4回「愛知の子ども縦断調査」の回答者（母親）である。2001年から3回にわたる調査の概要は、それぞれの調査を分析した論文を参照されたい^{4・5・6・7・8・9}。

第4回調査回答者は、前回（2004年実施）調査の回答者のうち、継続調査協力に同意し、郵送可能であった710人に、郵送により調査用紙を配布し、有効な回答のあった626人（小学校1年生の母親284人、2年生33人、3年生295人、4年生以上14人）である。回答率は88.2%、調査時期は、2007年3月であった。2年生は1歳半健診フォローアップ児がかなり含まれ、障害を持つ子どもの比率が他に比べ高い。4年生以上は3歳児検診フォローアップ児の他、対象児の姉妹などの誤回答の可能性もあるため、今回からの分析対象からははずした。その結果、本研究の分析対象者は612人となった。

2. 分析項目

今回分析したのは、次に述べる広汎性発達障害（PDD）に関連する項目の他、入学時の思い、入学前の子想との違い、子どもの現在の学校生活に関連する不安、子育て支援ニーズ、学校に対する要望についての、選択肢回答および自由記述である。詳細は前回の報告¹⁰を参照されたい。

3. 広汎性発達障害（PDD）に関する項目とPDD高群

広汎性発達障害（PDD）に関する質問項目については、文部科学省の「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」（2002年実施）の質問項目を使用した¹¹。その中のスウェーデンの研究者らによって作成された高機能自閉症に関するスクリーニング質問紙¹²（ASSQ）を参考にして作成されたという質問項目「対人関係やこだわり等」27項目から9項目を抽出した。文部科学省の実態調査では、通常学級に在籍する、高機能自閉症の傾向がある子どもを把握するためにこの質問項目が使用されているが、本調査の対象児には、2、3歳の時期に診断を受けた自閉症の子どもも含まれており、（精神遅滞を伴う）自閉症及び高機能自閉症を含む広汎性発達障害に関する質問項目として「対人関係やこだわり等」の質問項目を用いた。そこから9項目を選ぶさいに、文部科学省の調査項目から7項目選択している高浜市の2005年度版チェック表を参考にした。回答の点数化も、文部科学省の評点になった。

1年生と3年生のPDD得点は1点以下の子どもがほぼ半数である。PDDのり

スクファクターを持つ可能性がある子どもとして、点数の多い方から10%をカットポイントとして、「PDD高群」、それ以外を「一般群」とした。その結果PDD高群は、1年生35人、2年生11人、3年生31人、合計77人であった。小学校2年では、先に述べたように、健診事後のフォローアップグループ参加者や障害をもっている子どもが多く含まれているので、点数が高い子どもの比率が高くなっている。

次の「結果と考察」の項では、まず選択肢による数値データによりPDD高群と一般群を比較することにより、全般的な傾向をみる。さらに、PDD高群の自由記述回答を分析することにより、その具体的な内容をさぐる。その際、数値データについては2年生は全体数が少ないので省くが、自由記述は必要に応じて紹介することとする。

Ⅲ. 結果と考察

1. 小学校入学時の変化・成長・うれしかったこと

(1) 入学しての成長

「入学して成長したか」という問いに対する選択肢による回答を、PDD高群と一般群とで比較したのが表1である。1年生ではいずれの群も全体として、9割前後が「はい」と答えており、両群の間に差はない。しかし、3年生では、一般群は1年生同様9割が「はい」と答えているが、PDD高群では7割弱に下がり、「どちらともいえない」が3割になっている。入学してから3年間たつて振り返ってみると、「成長した部分と、そうではない点の両面」が見えてきているのだろうか。

表1 入学して成長したか

		はい	どちらともいえない	合計
1年	一般群	214(89.9%)	24(10.1%)	238(100%)
n.s.	PDD高群	33(94.3%)	2(5.7%)	35(100%)
3年	一般群	246(93.9%)	16(6.1%)	262(100%)
***	PDD高群	21(67.7%)	10(32.3%)	31(100%)

χ^2 検定 *** $p < .001$

自由記述回答により、さらに詳しく見てみよう。「小学生になって一番変わったこと」「成長したこと」を含むは、PDD高群の記述の内容を分類すると表2のようであった。3年生の親は、小学校に入ってすぐのことより最近のこのの方が印象に残っているようで、1年生の親とは多少異なった傾向がみられた。

1年生の親の回答には、自分の身の回りのことや宿題などを自分でするようになったこと、落ち着きがでたり感情のコントロールができるようになったことが多いのに対して、3年生の親では、手伝いや弟妹の世話をするようになったことや反抗的になってきたこともあげられていた。

友達関係については、1年生の親は友達ができた、増えたことを記述しているのに対し、3年生の親は「クラスの友達だれとでもしゃべったり、遊んだりできる」「特定の友達と遊ぶようになった」「周りの人の気持ちを汲み取って行動できるようになった」と、質的な変化についてふれていた。

PDD高群と一般群とでは、記述の内容にあまり違いはみられなかったが、PDD高群は「落ち着いてきた」の割合がやや多く、また「感情のコントロールができるようになった」「すぐにカンシャクを起こしたり夜泣きをしなくなった」「感情の起伏が穏やかになった」というような記述が特徴的であった。一方で、「集団活動が難しくなってきた」（2年 自閉症）、「1年生の2学期ごろから落ち着きがなくなってきた」（1年 アスペルガー症候群）という記述もあったが、後者は同時に「自己を出せるようになって成長（言うことをきかなくなり、手におえない）」と記述されており、自己主張・自己表現できることとの裏返しでもあるようだ。

表2 「小学生になって一番変わったこと」「成長したこと」(PDD高群記述回答)

	1年生	3年生	合計
自分の身の回りのことや宿題などを自分でするようになった、自分ですることが増えた	15	5	20
落ち着きがでた、感情のコントロールができるようになった	6	1	7
友達が増えた、友達関係がよくなった	6	4	10
自己主張できる、自分の意見や話したいことが表現できる	4	4	8
手伝いや弟妹の世話をするようになった	1	5	6

(2) 入学して嬉しかったこと・辛かったこと

「子どもが小学校へ入学して一番嬉しかったこと」「子どもが小学校へ入学して一番辛かったこと」のPDD高群の記述内容を分類してみると、表3、表4のようであった。1年生の親と3年生の親では、それほど違いはなく、「嬉しかったこと」としては、友達関係や、元気に楽しく登校できていることが多かった。友達関係については「入学してからの変化」で挙げられていた数よりも、「嬉しかったこと」として挙げた数の方が多く、新しい環境で友達ができるかどうか、うまくやっっていけるかどうかは、入学前の親の不安の一つであったのではないかと推測される。このようなことは、一般群の子どもについても、同じような傾向がみられた。

「辛かったこと」も、友達関係、友達とのトラブルに関することが多かった。とくに、「いじめられた」「登校班の上級生にいじめられた、からかわれた」が多かった。これも、一般群の子どもの場合と同様の傾向である。しかし、友達関係に難しさを抱えている子どもであるだけに、親は心配することも多く、いじめやトラブルがあれば人一倍心を痛め、友達ができると非常に嬉しく感じるのではないかと推測される。

先生との関係も、「先生が子どもの話に耳を傾けてくれる」「理解してくれる」など肯定的な事柄と、「先生と相性が悪い」、「先生に理解してもらえない」という否定的な事柄と、両者がそれぞれ挙げられていた。

また、「辛かったこと」で友達関係のトラブルをあげた人でも、「嬉しかった

表3 「子どもが小学校へ入学して一番嬉しかったこと」（PDD高群記述回答）

	1年生	3年生	合計
友達ができた・増えた	12	12	24
元気に、楽しく登校できている	6	3	9
できることが増えた	5	3	8
その他、内面的成長	4	4	8
先生との関係	3	0	3
身体が丈夫になった	0	2	2
母親の自分の時間が増えた、送り迎えをしなくてよい	1	1	2

表4 「子どもが小学校へ入学して一番辛かったこと」(PDD高群記述回答)

	1年生	3年生	合計
いじめられた、からかわれた、友達とのトラブルで傷ついた	13	10	23
友達ができない	0	1	1
先生との関係(相性が悪い、理解してもらえない)	1	3	4
年齢相応のことができない	3	3	6

こと」で、友達ができた、楽しく学校に行くようになったと回答しているケースが多かった。

「母親の自分の時間が増えた」は、一般群に比べると、少ない比率であり、入学後も子育ての困難が多いことがうかがわれる。

2. 現在心配なこと・入学前の予想と違った事

現時点での学校関係のことでの心配なこと、および入学前に予想していたことと違っていたことについて、友達関係、勉強面、先生の対応、保護者どうしの関係に分けてみてみよう。

(1) 子どもの友達関係について

表5は、「現在このお子さんの学校生活について不安や心配になっていること」についての回答を、PDD高群・一般群別、学年別にまとめたものである。

「友達ができないのではと心配」は「そう思う」と「ややそう思う」を加えたもの(「そう思う側」とする。以下同じ)はPDD高群が5割前後であるのに対し、一般群では1割台、「集団活動に参加できないのではと心配」は「そう思う側」がPDD高群では5割前後であるのに対し、一般群では1割弱、「学校に通うのを嫌がるのではと心配」は「そう思う側」がPDD高群では4割であるのに対し、一般群では1割、「友達にいじめられるのではと心配」は一般群も3割と多いが、PDD高群ではさらに多く6割台になっている。

次に「学校生活について心配なこと」についての記述回答では、全体としては133人の回答があり、約2割の回答率であった。PDD高群の親の回答は77人中26人であり、34%と回答率が高く、この数値からも不安が高いと考えられる。PDD高群の回答内容を分類すると、表6のようである。

表5 現在心配していること

		そう思わない	おそれそう思わない	ややそう思う	そう思う	合計
友達がで きない	1年 一般群	129(53.8%)	74(30.8%)	32(13.3%)	5(2.1%)	240(100%)
	*** PDD高群	4(11.4%)	11(31.4%)	13(37.2%)	7(20.0%)	35(100%)
	3年 一般群	156(59.8%)	70(26.8%)	32(12.3%)	3(1.1%)	261(100%)
	*** PDD高群	8(25.8%)	8(25.8%)	7(22.6%)	8(25.8%)	31(100%)
集団活動 に参加で きない	1年 一般群	148(61.7%)	72(30.0%)	20(8.3%)	0(0.0%)	240(100%)
	*** PDD高群	6(17.1%)	9(25.7%)	14(40.1%)	6(17.1%)	35(100%)
	3年 一般群	174(66.7%)	69(26.4%)	16(6.1%)	2(0.8%)	261(100%)
	*** PDD高群	6(19.4%)	10(32.2%)	8(25.8%)	7(22.6%)	31(100%)
学校を嫌 がる	1年 一般群	154(64.2%)	62(25.8%)	20(8.3%)	4(1.7%)	240(100%)
	*** PDD高群	8(22.9%)	13(37.1%)	10(28.6%)	4(11.4%)	35(100%)
	3年 一般群	180(69.0%)	54(20.7%)	23(8.8%)	4(1.5%)	261(100%)
	*** PDD高群	9(29.0%)	10(32.3%)	8(25.8%)	4(12.9%)	31(100%)
いじめら れる	1年 一般群	98(41.0%)	74(31.0%)	55(23.0%)	12(5.0%)	239(100%)
	*** PDD高群	4(11.4%)	9(25.7%)	14(40.0%)	8(22.9%)	35(100%)
	3年 一般群	111(42.7%)	80(30.8%)	59(22.7%)	10(3.8%)	260(100%)
	*** PDD高群	4(12.9%)	7(22.6%)	11(35.5%)	9(29.0%)	31(100%)
他の母と 親しくな れない	1年 一般群	100(41.9%)	75(31.4%)	57(23.8%)	7(2.9%)	239(100%)
	• PDD高群	5(14.3%)	15(42.8%)	12(34.3%)	3(8.6%)	35(100%)
	3年 一般群	100(38.3%)	106(40.6%)	44(16.9%)	11(4.2%)	261(100%)
	• PDD高群	8(25.8%)	10(32.3%)	9(29.0%)	4(12.9%)	31(100%)
保護者会 など大変	1年 一般群	110(46.1%)	88(36.8%)	34(14.2%)	7(2.9%)	239(100%)
	n.s. PDD高群	10(28.6%)	15(42.8%)	8(22.9%)	2(5.7%)	35(100%)
	3年 一般群	113(43.3%)	88(33.7%)	48(18.4%)	12(4.6%)	261(100%)
	† PDD高群	8(25.8%)	9(29.0%)	11(35.5%)	3(9.7%)	31(100%)
先生にし つけの悪 い子と思 われるの では	1年 一般群	139(58.1%)	79(33.1%)	20(8.4%)	1(0.4%)	239(100%)
	*** PDD高群	5(14.3%)	18(51.4%)	10(28.6%)	2(5.7%)	35(100%)
	3年 一般群	152(58.2%)	82(31.4%)	25(9.6%)	2(0.8%)	261(100%)
	** PDD高群	9(29.0%)	14(45.2%)	8(25.8%)	0(0.0%)	31(100%)
勉強につ いていけ ない	1年 一般群	89(37.2%)	78(32.6%)	57(23.8%)	15(6.3%)	239(100%)
	† PDD高群	6(17.1%)	13(37.2%)	11(31.4%)	5(14.3%)	35(100%)
	3年 一般群	96(36.8%)	87(33.3%)	57(21.8%)	21(8.0%)	261(100%)
	• PDD高群	3(9.7%)	12(38.6%)	10(32.3%)	6(19.4%)	31(100%)

χ^2 検定 † $p<.1$, * $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

とくに1年生の親に、友達や上級生との関係を心配する人が多かった。「こども会や分団での集団登下校など」「上級生が下級生を陰湿にからかう事が周囲の子どもたちにも伝わるようです」「友達から仲間はずれにされないか」「複数

表6 「学校生活について心配なこと」(PDD高群記述回答)

	1年生	3年生	合計
友達や上級生との関係	6	1	7
先生が理解してくれるか	1	0	1
落ち着き、忘れ物が多い、情緒不安定なところ	3	2	5
自分の思っていることが伝えられるか	1	1	2
体力的についていけるか、早寝早起きができない	1	1	2

の子から、いろんな場面でからかわれたり、物でたたかれたりしている」「からかわれたり、いじめられたりしないか心配」「友達がいやがることをよくしてしまう」などの回答があった。

(2) 勉強面について

現在不安なこととして、「勉強についていけないのではないか」は、PDD高群は一般群よりも不安に感じている率が高い¹³。1年生よりも3年生の方がより一般群との差は開いている(表5)。学校の勉強の難しさが高まっていくからであろう。

次に、「入学前に予想していたことと異なっていたこと(勉強面、先生、他の保護者)」についての質問項目への回答をみてみよう(表7)

「勉強面」では、1年生で、PDD高群は「かなり違った」とする回答が3割と

表7 入学前の予想と違った事

		かなり違った	だいたい同じ	合計	
勉強	1年	一般群	39(16.5%)	197(83.5%)	236(100%)
	*	PDD高群	11(31.4%)	24(68.6%)	35(100%)
	3年	一般群	37(14.3%)	222(85.7%)	259(100%)
	n.s.	PDD高群	4(12.9%)	27(87.1%)	31(100%)
先生	1年	一般群	48(20.3%)	188(79.7%)	236(100%)
	†	PDD高群	12(34.3%)	23(65.7%)	35(100%)
	3年	一般群	48(18.5%)	211(81.5%)	259(100%)
	n.s.	PDD高群	7(23.3%)	23(76.7%)	30(100%)
保護者	1年	一般群	23(9.8%)	212(90.2%)	235(100%)
	n.s.	PDD高群	3(8.6%)	32(91.4%)	35(100%)
	3年	一般群	16(6.1%)	245(93.9%)	261(100%)
	**	PDD高群	6(19.4%)	25(80.6%)	31(100%)

χ^2 検定 † $p<.1$, * $p<.05$, ** $p<.01$

なっており、一般群の約2倍の比率である。3年生では差がない。その内容をPDD高群の記述回答から具体的にみてみよう。

まず、否定的な回答として、次のように勉強の内容やペースの速さについての戸惑いが多かった。「教科書を見てびっくりした。私たちのころとは違っていたから。ゆとり教育のためといっても授業時間も少ないし、塾に通わせました」（1年）、「1学期はあまり勉強しないと思っていたが、2学期から急に勉強のペースがあがったと感じた」（1年）、「勉強が進むのが速いため、のんびりしていると遅れてしまう」（1年）、「字がきれいに書けるが丁寧すぎる」（1年）、「字が書けなかったので、ひらがなを覚えるのに時間がかかりました」（1年）、「学習を理解できていないのに、子どものペースを考えず進めていくこと」（2年 自閉症）「今のほうが一見簡単そうに見えて難しい」（3年）、「もう少し勉強熱心に取り組むと思った」（3年）「宿題が先生によってかなり違う」（3年）、「みんなについていけず個別指導を受けている」（3年）。

一方、肯定的な回答は、「思ったより、ついていっていた」（1年）、「思っていたより、楽しそうに勉強している。勉強は好きだと言ってくれる」（1年）、「教え方が丁寧で楽しそうに授業が進められている」（1年）、「もっとできないと思っていたが、先生の丁寧な指導のおかげでついていけています」（2年）、「意外に（子どもに）得意分野がある」（3年 自閉症・特別支援学級）などである。子どもの特徴を理解した上で、できないかもしれないと予想していたわりにはできているということであろう。

(3) 教師について

「現在心配していること」（表5）の質問のうち、「先生にしつけの悪い子と思われるのでは」は、「そう思う側」が両学年ともPDD高群では3割前後であるの対し、一般群では1割であった。

また、「入学前の予想と違った事」では、「先生」について「かなり違った」は1年生でPDD高群の3分の1が「かなり違った」と答えているのに対し、一般群では2割であった。

PDD高群の「違った」内容を記述回答よりみてみよう。先生の対応については、小1では、「話をきちんと聞いてくれ、信頼できた」「とてもやさしい人だっ

た」「よく子どものことを見てくれている」「全体をみていると感じたが、一年を過ぎて今ではよく娘のことを理解してくれていると思う」「子どもの特徴を理解してくれるかどうか懐疑的だったが、かなりかわいがっていただいた」「幼稚園よりももっと（親にも）細やかな心遣いが感じ取れた」という肯定的な感想があった。一方で、「もっと子どもの話や要望を聞いてくれると思った」「前の学校（転校してきた）はのんびりだったが、今の学校は宿題が多くついていけない」「高学年から低学年にきた先生で、先生からの指摘が厳しい」などの否定的な感想があった。

小3でも、「特殊学級に入ったせいか連絡が行きとどいていた」（自閉症）という肯定的な感想と、「今年の担任は、子どもが怯えるくらいの叱り方をする」「もっと細かくみてくれると思っていたが、通り一遍の話が多かった」「友達関係を丁寧にみてくれない」「先生によってずいぶん違うので戸惑った」という否定的な感想があった。

「心配なこと」としても、先生に対しては「担任の先生によって、子どもに対する接し方が違うこと。子どもに対してどれだけ理解してくれるか」「先生によってはこの子は悪い子というレッテルを貼られてしまったこと」（2年）などが挙げられていた。

また、小2で自閉症児の親で「特殊クラスの先生は子どもを理解してつきあっていただきましたが、交流学級の先生の理解、知識のなさにおどろきました」という感想もあった。

これらは、これまでの幼稚園・保育園や小学校の前年度の担任の先生との比較で述べられていたり、幼稚園・保育園と違って小学校はきめ細かくみてもらえないことを覚悟してきたわりには、そうでもなかったという場合もあり、客観的な事実はわからない。しかし、多くの親の、独特な子どもの性格を理解してもらいたいという願いが読み取れる。また、クラス懇談会のときに「自分の育児や子どもへのかかわりをほめていただいた」という親（1年）もおり、親が認めてもらえることの大切さも確認できる。学校の教員同士の共通理解や学校と家庭との協力の大事さも改めて感じさせられる。

(4) 他の保護者との関係について

「現在心配していること」では、「他の母親と親しくなれないのでは」は、PDD高群では「そう思う側」が両学年とも4割台で、一般群の2倍程度となっている。また、「授業参観や保護者会に親が出るのが大変」は、3年生でPDD高群が一般群の2倍程度になっている（表5）。しかし、実際の参加頻度は一般群と差はなく、懇談会などへ「いつも参加する」のは1年生でPDD高群68.6%、一般群74.0%、3年生でPDD高群58.1%、一般群55.8%である。

また、「予想との違い」では、同様に3年生でPDD高群の2割程度が「かなり違っていた」と答えている（表7）。具体的には後述するように、他の子どもとは異なる特徴や困難さを持つ子どものことを、他の親に理解してもらうことや、子育てや勉強のことについて話し合うことのむずかしさを感じている人が多く、「ふつうの子」の親との関係作りの難しさ・負担感が、PDD高群の親の子育ての困難性を学年が進むにつれて増大していつていることを示唆している。

3. 心配・不安への親の対応、支援ニーズ

(1) 家庭での対応

上記のように、特にPDD高群の子どもの親は友達関係や勉強面で多くの不安を抱えている。家庭内での対応をまず見てみよう。

「心配なことについて誰かに相談したか」という問いに対して、1年生のPDD高群では9割が「はい」と答えており、一般群と比較しても相談する率が高い。3年生では両群とも相談するのは7割くらいになる（表8）

相談相手としては、両群・両学年とも一番多いのは「夫」である。家庭の中の「もうひとりの親」である夫が相談相手として選択されるのは当然のことで

表8 心配事があったとき、誰かに相談したか

		はい	いいえ	合計
1年	一般群	162(75.7%)	52(24.3%)	214(100%)
	• PDD高群	31(91.2%)	3(8.8%)	34(100%)
3年	一般群	162(69.2%)	72(30.8%)	234(100%)
	n.s. PDD高群	21(70.0%)	9(30.0%)	30(100%)

χ^2 検定 * $p < .05$

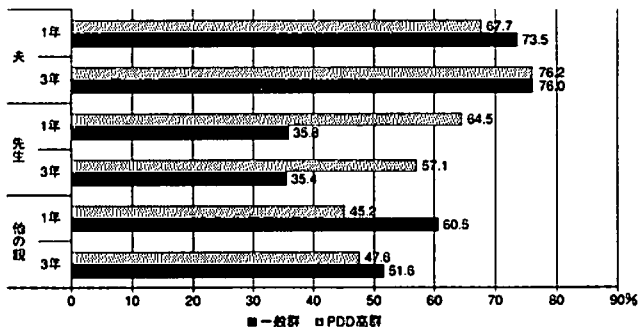


図1 相談相手 (複数選択)

あろう (図1)。

勉強面については、「家で宿題や勉強を教えているか」はPDD高群の方が「ほとんど毎日」と答えている人が1年生でPDD高群50.0%、一般群39.3%、3年生でPDD高群22.6%、一般群13.8%で、一般群より数値的には高いが有意差はない。しかし、教えている人に対しての「この子に教えるのは楽しいですか」という問いへの回答は1年生では有意差があり、PDD高群は「負担である」とする比率が半数近くにのぼっている (表9)。

表9 この子に教えることは楽しいか

		楽しい	負担	他	合計
1年	一般群	102(45.5%)	57(25.4%)	65(29.0%)	224(100%)
	PDD高群	9(28.1%)	15(46.9%)	8(25.0%)	32(100%)
3年	一般群	83(36.9%)	74(32.9%)	68(30.2%)	225(100%)
	PDD高群	9(32.1%)	13(46.4%)	6(21.4%)	28(100%)

χ^2 検定 * $p < .05$

「学習塾や通信教育などを利用している」は、1年生がPDD高群54.3%、一般群52.5%、3年生がPDD高群64.5%、一般群59.5%で、両群の間には差がない。しかし、「学習塾以外のおけいごとをしている」になると、1年生では一般群では8割と高いが、PDD高群では6割弱である (表10)。PDD高群では、学習面では家で教えたり学習塾に通わせたりしているが、家庭での学習援助の際の子

どもの様子から、さらに学習以外のおけいごととなると子どもへの負担を考え、1年生では躊躇する場合もあるのかもしれない。

表10 学習塾等以外のお稽古事

		いない	いる	合計
1年	一般群	46(19.2%)	194(80.8%)	240(100%)
**	PDD高群	15(42.9%)	20(57.1%)	35(100%)
3年	一般群	49(18.7%)	213(81.3%)	262(100%)
n.s.	PDD高群	5(16.1%)	26(83.9%)	31(100%)

χ^2 検定 ** $p < .01$

(2) 学校・教師に対する要望

「心配ごとの相談相手」としては、図1に見られるように、夫に次いで「学校の先生」が2番目に多く選択されている。PDD高群では一般群に比べ、先生を相談相手として選ぶ比率が高く6割前後であり、一般群の2倍近くとなっている。

このように、PDD高群の親にとっての教師の相談相手としての比重は高いが、実際に、「先生に、子どもの様子や家庭からの要望が伝えられる」と答えている比率が、3年のPDD高群ではもっとも低くなっているのが目を引く（表11）。

表11 先生に、子どもの様子や家庭からの要望伝えられるか

		できる	できない	どちらともいえない	合計
1年	一般群	210(87.9%)	4(1.7%)	25(10.5%)	239(100%)
n.s.	PDD高群	29(82.9%)	2(5.7%)	4(11.4%)	35(100%)
3年	一般群	218(83.2%)	6(2.3%)	38(14.5%)	262(100%)
n.s.	PDD高群	21(67.7%)	1(3.2%)	9(29.0%)	31(100%)

前述のような、「先生の理解や知識のなさ」「指導が厳しい」「通り一遍」などの印象を教師に対して持ってしまった場合、なかなか要望が伝えられないのかもしれない。

また、「学校での様子をもっと知らせてほしい」については、1年生のPDD高群では「とても必要」が7割であり、他の群が4～5割台であるのに比較してかなり高くなっている（表12）。

表12 学校での様子をもっと知らせてほしい

		必要ない	あまり必要ない	やや必要	とても必要とする	合計
1年	一般群	3(1.3%)	16(6.7%)	111(46.4%)	109(45.6%)	239(100%)
*	PDD高群	0(0.0%)	0(0.0%)	9(26.5%)	25(73.5%)	34(100%)
3年	一般群	4(1.5%)	29(11.1%)	120(46.0%)	108(41.4%)	261(100%)
n.s.	PDD高群	0(0.0%)	3(9.7%)	11(35.5%)	17(54.8%)	31(100%)

χ^2 検定 * $p<.05$

特にPDD高群の親にとっては、学校の教師は、心配ごとの相談相手として必要とされ、また子どもの様子を家庭に知らせることが期待されているが、実際にはその面でうまくいかなかったり、不安をかかえる親に伝えられていない状況もあるようである。このような親への子どもについての連絡や様子の報告、相談を受けやすい配慮が教師に望まれる。

(3) 専門機関への要望

子育て支援ニーズについては、本縦断調査3回目まで（幼児期）と同様の子育て支援ニーズ項目（「子どもの育て方やしつけについて相談する機関」「用事がある時子どもを預かってくれるところ」「他の母親との交流」「子育てから離れてリフレッシュできる場所」「安心して遊べる遊び場」）に関してはPDD高群と一般群ではほとんど差がなかった。

しかし、「子育てや教育の専門家の話を聞く機会」に対し「必要個」の回答は、一般群が6割台に対して、PDD高群の親は7～8割台と高かった（表13）。

表13 ニーズ；子育てや教育の専門家の話を聞く機会

		必要ない	あまり必要ない	やや必要	とても必要とする	合計
1年	一般群	11(4.6%)	76(31.9%)	123(51.7%)	28(11.8%)	238(100%)
†	PDD高群	0(0.0%)	5(14.7%)	24(70.6%)	5(14.7%)	34(100%)
3年	一般群	23(8.8%)	73(28.0%)	139(53.3%)	26(10.0%)	261(100%)
*	PDD高群	0(0.0%)	8(25.8%)	15(48.4%)	8(25.8%)	31(100%)

χ^2 検定 † $p<.1$, * $p<.05$

具体的な内容は、「子育て、子育て支援について日ごろ感じていること」の自由記述の中にこの点に関するかなり長文のPDD高群の記述があった。下記のようなものである。

ケースA（3年 知的障害）は、きょうだいにも障害を持つ子どもがいて、

将来のことへの不安が出されている。おそらくどこかへ相談にも行っているのだろうが、相談に行っているからと言って、不安が全て解消されるわけではないだろう。しかしながら、「子どもがのびのびすごし、自分らしさが出てきたこと」が嬉しかった、とポジティブにみている。初めから特別支援学級に入っており、予想外のことはそれほどなく納得しているとのこと、特別支援があり親も比較的落ち着いているようである。ただ、下の自閉症の子には「どうやって子育てしていけばいいのかわからず悩みが多い」という。「発達障害」「育てにくさを抱えた子ども」の子ども理解や対応については、いくぶん進んできただろうが、そのことと実際の子育ては直結しない。子育ての支援は、それぞれの家庭、時期によって援助は異なり、それは常にオプションなものを保護者と共に考えていくことが大切になる。

また、他のケースで、特別支援学級がない学校で、自分の子ども（3年）は友人関係を築くのが上手くなったと、成長を感じているが、特別支援が必要な子どもが多くいるように感じ、そのような支援を求める声もあった。

ケースB（3年）は、「1年の初めにひどいいじめにあい、学校に行けなくなってしまい、私が送り迎えしていました。2年になっても少しあり、3年生のクラスでも一時的にひどいいじめを受けました。そのせいで、どもることが体に出てしまうことがよくあります。少しずつは強くなったと思いますが、」と辛かったことを述べている。今は「新しい友達ができ一緒に遊んでいること、自分で学校に行けるようになったこと」を喜んでいる。その経験からであろうが、「子どものことで相談したい時に専門分野の方々が身近にいないので、各市町村にそういう方が置いてほしいと思います。気軽に相談できる場所がほしいです。」と要望している。

ケースC（1年）は、いじめがあって、泣いて登校するのを嫌がっていたことがあったが、今は元気に登校するようになったと喜んでいる。その経験からか、「電話などで、もっと相談できる場がほしい。学校の先生にはいつ電話してよいかわかりづらいし、なかなかできない。」と述べている。

ケースD（1年）も、登下校のさいに周りの児童とトラブルがあって「学校へ行きたくない」「死にたい」と言って泣かれたことが辛かったと回答している。

学校の先生に対しては、きちんと話をしたり聞いたりしてもらえ、信頼関係をもっている。心配なことは、「マイペース、スローペースで、周りに不愉快な思いをさせているであろうこと。でもこれによって本人が自ら協調性に気付いてくれることを願っています。」と述べている。この親の場合は、子育て支援も利用した経験からか、「話すことで悩んでいることが整理されれば嬉しいですが、かえって混乱するのが怖いという気持ちです。周りに自分の事、子どものことをよく知っている友人がいる点でも足が遠のいている感じですよ。」と回答しており、個別課題を抱えた親のための子育て支援-相談や交流のあり方を考えさせられる。

ケースE(3年)は子どもが日常生活において遅れがあることを心配しつつ、「子育てや教育の専門家の方々のお話を聞いたことはありますが、一般的なことが多く、自分の子どもにあてはまらないことが多いように思います。」と述べている。一般論的な啓発ではなく、その子にあった具体的・実質的な支援、相談が必要とされている。他にも「一般論では意味がない」と指摘する人が4人いた。

ケースF(2年 高機能自閉症)の場合、自身の子どもは先生の丁寧な指導のおかげで落ち着いて課題に取り組めるようになり、友達のことも嬉しそうに話してくれる。しかし、「少し発達障害がある子は、なかなか親にも認められずに小学校に入学し、皆に迷惑をかけたりにして苦労している人もいます。そのような子が減るような環境づくり(子育て支援センター内に相談窓口を常時設けるなど)を整えていただきたいです。軽度の発達障害の子は、本当に子育てがしづらいのです。」と訴えている。

一般的な相談や援助ではなく、自分の子の状態・特性や親子の困っている点に即した援助が必要とされていることが、伝わってくる。

(4) 地域での諸機関による支援

以上述べてきたPDD高群の子どもの変化・成長をめぐる親の喜びや辛さ、戸惑いや心配については、家庭・子育てを支援する環境があるかどうかによって、親の不安や捉え方も変わってくると予想される。この点について、「子育て、子育て支援について日ごろ感じていること」の自由記述を分析することに

よって検討してみたい。

○地域での親同士の交流の場、周囲の理解

ケースG（3年 広汎性発達障害）は「辛かったこと」で「多動を有しないため、目立つことがなく、先生に手をかけてもらえない、もう少し目を向けてほしい」と、正しく理解して欲しい気持ちを記述していたが、一方では、子どもが語彙が増え、自分の感情や意見を伝えられるようになったことに喜びを感じていた。「先生への戸惑い」を、学校生活について不安を感じる保護者と教育委員会の話し合いや親同士の交流の場で話ができ助かっているという記述もあった。また、親自身の自分のことについても「子育てに悩む親同士グチをこぼしあいながら、少しでも自分なりの成長があれば」と言及している。地域でのつながりが親の成長を促す、このような支援がとても大きな意味を持っている。

ケースH（1年）は、「辛かったこと」で「学校の事、学童の事、育児の事、さらに夫は一步…数歩下がり、ノータッチである事に辛かった。又、大事な事での意見のくいちがいも辛かった。」と書き、また「学年が変わるのでまた新しい先生となり、娘を理解していただけるか」に少し不安を感じている。しかし、「嬉しかったこと」で「休まずに通い、毎日を楽しく過ごしている事。（娘自身が）一つ一つのハードルをきちんと越え、成長していると思える事」と子どもの成長に喜びを感じている。その背景としては、「県大のキッズパークや瀬戸交流館などいろいろなイベントに娘と参加し、充実した日々です。学童（保育所）の指導員さんには大変お世話になり、また娘をととてもよく理解して指導していただいていると感謝しています。私自身、たくさんの不安での4月のスタートですが、正直、学校の先生ではなく、学童の方に助けていただいたという気持ちでいっぱいです。」というように、多くの支援やサポートが有効だったと思われる。

ケースI（1年）は、「子どもがきちんとやっけていけるか、不安で辛かった」と記述があるが、「嬉しかったこと」で「友達がたくさんできて、元気に学校へ行ってくれている」と記述があった。さらに、「子育て、子育て支援は、地域の関心と協力が必要であると思ってます。…が、実際、PTA活動の役員を

引き受けることになり、その協力の難しさを感じています」と難しさは感じながらも、親どうしのつながりをもち学校への協力もしている。

ケースJ（3年）では、通学班の上級生から少しいじめられていたことと、転校してしばらく友達がいなかったことを、「辛かったこと」として挙げている。しかし、「転校すると言った際に、多くの学校や学童（保育所）の友達が別れを惜しんでくれ、随分みんなに思ってもらっていたんだと分かり」嬉しかったと述べている。学校の先生はもっと細かく見てくれると思ったがそうではなかったと感じているが、学童保育でのつながりが支えになっていたようである。転居先での学童の保育料の高さや受け皿の少なさに対しては、不満・要望を出している。他にも学童保育所やトワイライトスクール（放課後子ども教室）のありがたさとともに、学童クラブ（学童保育所）が3年生までしか入れず、きょうだい在家で留守番していることに対して、支援の拡大を求める声、保育料を安くしてほしいという要望があった。

地域でのつながりをつくっていく支援を考えると、母親が仕事をもっている場合や経済的な困難も考慮する必要がある。保育園・幼稚園や学童保育所が親同士のつながりをつくる役割を果たすことが多いが、保育料が高くて子どもを通わせられない場合もある。「市立幼稚園を2年保育から3年保育にしてほしい。丸4年家で見るのはストレスになる時もあり、辛くあたってしまう時がある」という記述もあった。また、母子家庭で、転校してきたばかりで、子どもが病気のとき頼れる人もおらず、仕事を休むことも難しいケースもあり、心配なことに「友達をうまく見つけて仲良くしてほしい」と書いており、学童保育も利用できていないようであり、地域でのつながりをつくっていけるような支援と「仕事を休めないときの預かり」が必要とされている。

ケースK（3年）は、「辛かったこと」を「子どもが友達とうまく接することができず、クラスの中で浮いてしまう」と述べており、「嬉しかったこと」は記述していない。「幼稚園と違い学校の先生は授業が主で人間（友達）関係はあまり深くみとくれない」と感じている。そして「毎日、朝から晩まで子どもたちに対し、怒っている自分がイヤになります。パートの仕事をしていて忙しいので、時間通りことが運ばないとイライラ。上の子はおっとりしているの

で何をやるにも遅く、ボーっとして何回も言わないと動かない。運動神経がなく、スイミングや体操を習っているが思うように進まず、そこでまたイライラ。気長に待ってほめて育てないと思うが、どうしてもできない。育児書とかを見ると、自分はダメな母と思い、よけいに落ち込んでしまう。」と、自分と子どもの関係で苛立ち、悩んでいる。このような時に、地域でのつながりや当事者同士のつながりがあるとよいのだろう。しかし、仕事をしながらの人だと日中の集まりは難しいし、低料金で気軽に利用できる学童保育所や預かりの場などを通して、親の話を聞いてもらえたりつながりをつくってけるとよい。

また、広汎性発達障害などの障害に対する地域の人々の理解を広げていくことも重要である。ケースL（3年 自閉症）の子どもの場合は、特別支援学級に入っており学校ではいい関係のようで、みんなと仲良く遊べ、学校も嫌がらないで行ってくれている。しかし、地域での周囲の理解がなかったこと、母親が仕事もして地域で役員がいろいろと重なり大変だったことから、地域の理解と負担を減らすサービスのニーズが語られている。

ケースM（3年）は、2年生のときに、「子どものSOSに先生が気づいてくれずヘルペスになったこと」が辛かったことだが、「活発になって周りの人の気持ちを考えられるようになった」ことに嬉しさを感じている。そして、夫が子育てに非常に協力的で助かっていること、父親の参加・協力、母親の大変さを理解することの大切さについて記述している。

Ⅳ. まとめ

小学校低学年のPDD高群の親は、子どもの友達関係がうまくいか、集団活動へ参加できるか、登校を嫌がらないか、勉強についていけるかという不安と、先生との関係、母親自身と他の母親との関係についての不安が、一般群の親よりも高かった。人間関係や感情のコントロールの面で難しさをもっている子どもたちであるだけに、親の不安が高いことは納得できる。子どもに対する心配だけではなく、先生が理解してくれるか、そして他の保護者が理解してくれるかどうかということまで心配が及んでいることは、すでにあげた宋らの調査結

果とも合致する。そして、このような親は、幼児期からこれまでに保育者や他の保護者との関係で気を遣い、苦勞してきたと予想される。

PDD高群では、小学生になっての変化・成長したことは、1年生については自分の身の回りのことなどを自分でできるようになったことを記述した親が多いが、次いで友達関係に関することが多く、入学して嬉しかったことも、友達ができ、友達が増えたことに関する記述が多かった。それだけ、新しい人間関係を築いていく時期であるがゆえに、友達に関する不安も大きかったのではないかと予想される。一方で辛かったことも友達とのトラブルに関する記述が多く、小学校入学後も友達関係で嫌な思いをすることも多い反面、関係がうまくいくと喜びも大きいことがうかがわれる。

勉強面では、PDD高群には、授業のペースが速く内容が難しいことに戸惑いを感じている親がおり、学習塾に通っている割合は、一般群と変わりがなかった。さらに、家で宿題や勉強を毎日教えている人が一般群よりもやや多い傾向にあった。しかし、教えることに負担を感じている親も一般群に比べてやや多く、学習面での難しさや親の苦勞も読みとれた。

先生との関係では、PDD高群では、心配事は学校の先生にもよく相談している反面、3年生では先生に要望を伝えることができる親が一般群に比べて少なくなっている。「学校での様子をもっと知らせてほしい」という要望もとくに1年生では高い。PDD高群の親については、記述回答からも学校に子どものことを理解してほしいという思いが強いことがうかがわれ、学校の中での教員同士の共通理解も求められている。

学校・先生との関係が必ずしもうまくいってなくても、地域で親どうし交流の場や機会がもっている場合、そこでのつながりによって子どもと親・家庭が支えられているケースもあった。しかし、母親が仕事を休めない家庭や経済的に学童保育所に通えない家庭もあることを配慮して、地域でのサポート体制を構築していく必要性が示唆された。地域や保護者の理解を高めていくためには、学校や地域での講演会の開催やリーフレットの配布、保護者同士の交流会の援助などの取り組みが広がっていくことも望まれる¹⁴⁾。

また、発達障害や育てにくさを抱えた子どもの子育てに対応した、専門的な

相談先や同じような課題・悩みを抱えた親同士の交流が求められていた。近年、地域によっては、まだ障害が明らかとなっていない、あるいは養育者の理解や認識が「障害」という認識にはなっていない段階においても共通する「子育て支援」として、「発達障害」の可能性を持つ幼児と親への子育て総合支援センターによる支援の取り組みも見られる¹⁵。

また、そのような親子を対象とした子育てサークルが、保健所・保健センター等が支援してできてきている。さらに、ペアレント・トレーニングを行う支援グループや医療機関がそのトレーニングを活用して家庭と学校が連携・協力している例もみられる¹⁶。

このように親が子育ての悩みに共感してもらえ、個別的・具体的なアドバイスがもらえる支援があることは、学校にとっても教師による支援をバックアップすることにつながり、幼児期から小学校への移行期の支援がよりスムーズになることが期待される¹⁷。

今回は、広汎性発達障害の傾向・可能性がある子どもについて、小学校への移行時の親の子育ての困難や不安、支援ニーズを検討したが、これらが乳幼児期からどう変化してきているのか、さらに縦断的に分析していきたい。

本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金による研究（基盤研究C、平成18年度～21年度、課題番号18530760）によるものである。

注

- 1 杉山登志郎（2007）発達障害の子どもたち 講談社現代新書。
- 2 宋慧珍・伊藤良子・渡邊裕子（2004）高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと家族への支援に関する研究—親のストレスとサポートの関係を中心に— 自閉症スペクトラム研究 3, 11-22.
- 3 宋慧珍・伊藤良子・渡邊裕子（2004）高機能自閉症・アスペルガー障害の子どもたちと親支援ニーズに関する調査研究 東京学芸大学紀要1部門 第55集, 329-338.
- 4 神田直子・山本理絵（2001）子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方 愛知県立大学児童教育学科論集 35, 21-42.
- 5 山本理絵・神田, 直子（2003）子育て困難を抱える親への子育て支援のあり方(2)「育児不安」と性別役割分業・母親役割意識の関連を中心に 愛知県立大学児童教育学科論集 36, 39-54.
- 6 山本理絵・神田, 直子（2003）育児期の困難さに応じた子育て支援 季刊保育問題研究

- 201, 126-140 新読書社.
- 7 神田直子・山本理絵 (2004) 子どもの「育てにくさ」と親の育児不安・マルトリートメント—1歳から4歳の発達の变化 愛知県立大学児童教育学科論集 37, 31-40.
 - 8 神田直子・山本理絵 (2005) 子どもの「育てにくさ」と親の育児不安・マルトリートメント(3)—1歳から6歳の横断的分析および3年間の縦断的分析より— 愛知県立大学児童教育学科論集 38, 1-12.
 - 9 山本理絵・神田直子 (2005) 子どもの「育てにくさ」と育児不安・マルトリートメント(2):4歳児と6歳児を中心に 愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編 53, 33-56.
 - 10 神田直子・山本理絵 (2008) 幼児期から学童期への移行期における親の子育て状況と不安、支援ニーズ—「第4回愛知の子ども縦断研究」結果第1報— 愛知県立大学文学部論集 児童教育学科編 56, 17-34.
 - 11 文部科学省 (2002) 「通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」調査結果.
 - 12 Ehlers, S., Gillberg, C., & Wing, L. (1999) A screening questionnaire for Asperger syndrome and other high-functioning autism spectrum disorders in school age children. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 29, 129-141
 - 13 本研究ではPDD群の人数が少ないため、危険率10%水準まで、有意差ありと表示する。
 - 14 山本理絵 (2007) II.幼稚園を中心とした小学校への移行支援の取り組みと課題 田中良三ら 発達障害児の幼児期から小学校への移行支援 愛知県立大学児童教育学科論集 41, 53-58.
 - 15 瓜生淑子・田丸尚美・小淵隆司・西原睦子・比良岡美智代・池添素・浜谷直人 (2008) 「軽度発達障害」児の早期発見・早期対応をめぐる地域の取り組みと今後の課題 日本発達心理学会第19回大会発表論集, 172-173.
 - 16 山本理絵 (2008) 子育て支援とペアレント・トレーニング 湯浅恭正樹著 よくわかる特別支援教育 192-193 ミネルヴァ書房、岩坂英巳・中田洋二郎・井調知美 (2004) AD/HDのペアレント・トレーニングガイドブック じほう.
 - 17 小淵隆司 (2007) III.小学校への移行支援を可能にする要因—発達相談・コンサルテーションの事例から— 田中良三ら 発達障害児の幼児期から小学校への移行支援 愛知県立大学 児童教育学科論集 41, 59-64、幼児期からの継続したかかわりや支援があった場合の移行支援を可能にする要因を指摘している。